



グランシップマガジン
[ジー] vol.33

GRANSHIP magazine
WINTER 2006

SPECIAL-1
2006年しずおか
連詩の会

「馬の銅像」の巻

次代を創る顔

イラストレーター 古屋 あきさ

しずおかアーティスト・リレー

画家 藤原 由葵

SERIES わが羅針 第33回

橘家 圓蔵

SPECIAL-2

空飛ぶ作家

サン＝テグジュペリ

村松友視の文化漫遊①⑨

グランシップ ベンクラブ

八木 洋行

(静岡県文化財団発行 季刊誌しずおかの文化編集長)

二〇〇六年 しずおか

連詩の会

「馬の銅像」の巻

銅像にかかる一枚の布。
その除幕の瞬間、連詩は始まる。

水平線や流星群、あるいは光や時間など、これまでの

第一編は、きわめて広い視界から始
まっていた。ところが今回のタイトル
は「馬の銅像」。今までとはやや趣の

違うスタートに二層の興味を募らせる。それはま
さに銅像の除幕前の期待感、緊張感に似ている。

今回、連句でいうところの発句の大役を背
負ったのは、日本語で詩を書くアメリカ人、アー
サー・ビナード氏。発表の席では、最初の五行を

担った者としての責任を感じつつの創
作だったと振り返った。紅一点、絵本
作家としても活躍の木坂涼氏は、三
度目の参会。現代歌壇の代表的存在
である岡井隆氏も、昨年に続いで
の登場となった。一方、唯一の初参加者と
なったのが野村喜和夫氏で、これまで
経験してきたダンスや音楽とのコラ
ボレーションとはまったく違う作業に
ついて「楽し難し」と表現した。

さて、五人目の参加者であり、毎回
さばき手を務めるのは、連詩の第一人
者といわれる大岡信氏である。七回
目となる今回について、氏は「馬のご
とく駆けるものを動力に優秀な連
衆に恵まれ、進行もきわめて楽だった」

と語った。氏との長年の縁から今回発表会の
司会を務めたNHKアナウンサー桜井洋子氏も、創作の
現場は和気あいあいとした雰囲気で、「大岡ゼミの合宿の
よう」でもあったと報告。

そんな創作時間を経て完成された全四十編。ときに
冗談や笑いを織り込みながらの発表の席では、詩人による
朗読の後、連詩の特徴でもある詩の繋がりが解き明かさ
れ、来場者たちは、単詩とは違う、連詩の魅力を堪能した。

創作 二〇〇六年十二月二十三日(木)〜二十五日(土) ホテルセンチュリー静岡
発表 二〇〇六年十二月二十六日(日) グランシップ 十一階 会議ホール・風

連

詩とは、連句や連歌の美学をベースにした創作現代詩で、毎年さばき手を担う大岡氏は、その提唱者であり、第一人者。定まった形式はないが、本会では、五行と三行の詩を交互に繰り返すフォームをとっている。各詩にはさまざまな視点、モチーフが織り込まれ、別の詩人が後の詩を創作し繋いでいく。発表会では、創作者による朗読のほか、繋がりを解くための解説が行われ、以下は、作品全編と、その解説の一部である。

「ほくそ笑む」詩人あれば、偶然に感謝する詩人あり。

【第一編／第五編の解説】

アイサー…詩を書き出す前、彫刻家なら彫り出す前には無限の可能性がある。銅像も除幕の瞬間に限定されて、なんだ創立者か、知事の顔かということになるけど。(笑)僕は「ほくそ笑む」の語源となった「人間万事塞翁が馬」の故事から、逆に馬がほくそ笑む場面を死ぬまでに書きたいと思っていたんです。

喜和夫…前の「ボストンバッグ」から旅を連想。実は北京からそのまま静岡に来たんです。ホテルの最上階から「とんび」が見えて、そつした偶然の中に自分を投げ込むのが連詩の楽しさだと思っています。

隆…僕の席からは廊下しか見えなかった。(笑)僕も昔、中国に行ったことを思い出して、「魔女」と「仙女」の話は私生活とは関係ありません。最後の一行は本音です。(笑)

涼…「魔女」とくれば、黒猫。国際的な世界から、ぐつと身近に。当日の静岡新聞にカラーで載っていた「干し大根」に引き寄せました。

信…大根のことを「デーク」と言っただけで、みんな言わないという。地元言葉なんだろう。三行目で降はフィクションです。探してもそんな詩人はいませんよ。



創作 ホテルセンチュリー静岡



一 「今のうちならまだ何にでもなれる」と

布をすっぽりかぶせられた馬の銅像はほくそ笑むふさふさの尻尾を竹箒に変え、ごつい頭部をボストンバッグに化けさせ、蹄は受話器に……さあ、除幕の瞬間

二 霧の北京から持ち帰ったのは

天安門広場で風をあげる夢
いましもとんびが窓すれすれにその風のように

三 胡同の夜店で人形を買ったことがあった

以来 魔女と仙女のちがひに悩んだ
魔女とブロッケン山を登ってるんだか
いいさ どっちだって幸せなら、さ

四 黒猫が夜道をよぎる

ふと 振りかえると白肌の
干し大根 月明かりを集めて

五 ダイコンのことをデークと言っていた

なつかしい旧いともだちよ
今は亡命詩人として
パリの陋屋ぐらし
ねずみは出るか 君の台所にも

六 引越しのたびに母は 曾祖母の

形見の皿をタオルにくるんで膝にのせていた
新しい家までずっと 嬰兒を抱く面持ち

七 血まみれになって生まれてくる私たち

だからといって血まみれになって死んでもいい
というものでもないでしょう
この世の果ての海のおもてで
昼寝する蝶もいますからきつときつと

アイサー

喜和夫

隆

涼

信

アイサー

喜和夫

「全世界的に見ても、ここまで連詩に取り組み続けているのは、ここ静岡だけです」



大岡 信

おおおか ますこと

東京大学文学部卒業。詩集『記憶と現在』『春 少女に』『捧げるうた』50篇、『旅みやげ にしひがし』。著作『折々のうた』『通巻18冊』『連詩の愉しみ』『ヨーロッパで連詩を巻く』『うたげと孤心』『日本語の豊かな使い手になるために』など。現在、日本芸術院会員。2002年国際交流基金賞受賞。2003年文化勲章受章。2004年レジオン・ド・ヌール勲章受章。1931年静岡県三島市生まれ。

「こんなに濃密に言葉と格闘した三日間はありません。詩人冥利に尽きます」



野村 喜和夫

のむらきわお

早稲田大文学部卒。現代詩の先端を走り続けるとともに、批評、翻訳、朗読パフォーマンスなども行う。詩集『反復彷徨』『特性のない陽のもとに』（歴程新鋭賞）『現代詩文庫・野村喜和夫詩集』『風の配分』（高見順賞）『ニューインスピレーション』『現代詩花椿賞』『街の衣のいちまい下の虹は蛇だ』。評論『ランボー・横断する詩学』『散文センター』『21世紀がエジー計画』『金子光晴を読もう』『現代詩作マニアル』。CD『UTUTU / 独歩住居跡の方へ』など。1951年埼玉県生まれ。

「過去の参加の経験が今回の連詩に加えられて、時間が連結されたような気がしました」



木坂 涼

きさかりょう

和光大学文学部卒。詩集『ツツツと』『現代詩花椿賞』『南南東』『金色の網』『芸術選奨文部大臣新人賞』『五つのエラーをさがせ!』『刺繍日記』『音の箱舟 モーツァルト』ほか。エッセイ集『おとこ親の書いたこどもの詩』『ペランダの博物誌』。絵本に『みんなおっぱいのんでたよ』『しきしきむらのはる』『ひらきます』。翻訳絵本に『ヨセフのだいじなコート』『ハエをのみこんだおばあさん』『ともだちからともだちへ』『ワイス・ブラウンの詩の絵本』『ピッツァぼうや』など。1958年埼玉県生まれ。

八 教授はしづかに笑った
この世とあの世のあひだの海境といふ坂を
小舟に乗り小さき子の神が渡って来たりしてね

九 階段式の講堂に本日の演題の垂れ幕
演壇には水差し、百合の花
皆の注目のなか講師の登場
この緊張の最中に ああ
センセイの背中がかゆい！

十 「かゆいところに手が届くように」
というたとえがびったりの編集者
うちの娘のお仲人さん

十一 エディターの甘言に乗せられ
『豆腐料理ABC』といふ本を書く
廊下を歩く足音が気になるので
ラムプをそつと吹き消して
靈感の訪れるのを待つ一日

十二 やけどするよ
ときみはいうが
知ってるよあらゆる皮膚は炎である

十三 先祖代々の墓 真新しい墓
久しく誰もこない墓 花と
酒の絶えたことのない墓
石は今夜の雨にみな
ひとしく肌を冷やされている

十四 ぽかぽかと塊りをなす
春の暖気に湯気をたてて
目をひらく今年の蛙 竹やぶの中

十五 モーツァルトの指が紡ぎだした練習曲を
生まれて三年目の男の子の手が弾く
おそろおそろ でもびよんと
飛び出るように 春の部屋から
夏の方へ

十六 風車が勤勉に回ってゐる海辺
岬は淡い雲のなかへ飛び出してゐる
「ドン・ジョヴァンニ」って漁色家の話だったな

隆

涼

信

隆

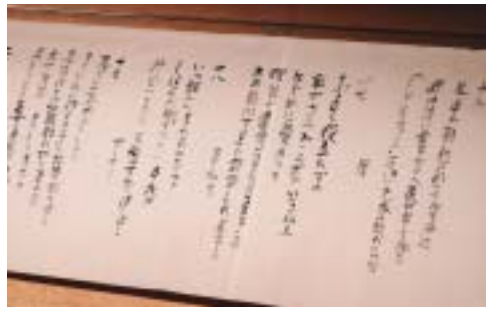
喜和夫

アーサー

信

涼

隆



湯船は言葉と怖れを曳航し、
スペインの港、津軽の海まで。

【第十八編く第二十二編の解説】

アサー…「ぬめぬめ」としたままでは…と思い、それをお風呂に入れて洗ったほうがいいと。連詩の方もすえた匂いがしてきましたし。(笑)

信…このままでは狭いところに落ち込んでしまいそうだったので、居る場所を変えようと。ホテルから「伊豆」半島が見えて、なぜか「スペインの港」を思い出した。サルバドル「ダリ」と「ガラ」という有名な夫婦をもとに創りました。

涼…「ダリ」といえば上向きにクリンと固められたかのような「髭」。前の詩には明るい陽射しを感じたので、そこを日本の海に場を移しました。

喜和夫…「ダリ」とルイス・ブノールが共同制作した『アンダルシアの犬』という映画に剃刀で眼球を裂くシーンから、こんな詩に。僕のところにくると「血まみれ」とか「やけど」とか、そんなものばかりで申し訳ありません。(笑)ちょうど『飛行機雲』が見えて、困ったときの窓の外、です。

隆…やつぱり座席にハングライがあるよ。うで…。(笑)前に「恐怖」とあり、いくら野村さんと今回の暗黒面を引き受けるにしてもこのままではまずいと、気持ちを鎮めました。

十七

およそ役立たずの
私やきみがこの世にいる以上
はじめに愛ありき

理性や道徳が生まれたのはそのあとのことだ
ああ胎内でみたぬめぬめした月がなつかしい

十八

いつ誰からもらったのだったか
しほんだ袖^ず子ふたつ 今夜は
仲むつまじく 湯船の隅にぼこぼこ

十九

スペインの港ポルト・リガト
そこに似た伊豆の浜辺で牡蠣の殻を拾った
足指はその牡蠣殻に切り裂かれた
九十年前 ダリという青年が
ガラという名の美女と逢引きしていたポルト・リガトの牡蠣殻

二十

画家の髭はさびしい
頬骨をくると囲む形に固められて！
髭の憧れは津軽海峡にたゆたうワカメ

二十一

空のキャンバスを裂くように
飛行機雲いやあれば
音もなくすすむ
注射針

二十二

いや、怖れるまでもない
男から女へ流れる川は必ず
おだやかな沼を求めて迷ふもの

二十三

自分が生まれ育った家を
三十年ぶりに訪ねようとして道に迷った
なにもかも記憶より小さくなってしまつて
やつとつかんだ手掛かりは裏庭の松の木 そいつは
こっちの記憶に合わせて成長してくれていた

二十四

宇宙飛行士が宇宙へ飛び出て戻る
感覚は新しく目覚め記憶される
紙一枚に 重みのあること

二十五

一滴の水があと一瞬で
滴たり落ちる寸前を
こらえこらえている映像——
あれは私のことだった そのカメラマンの
別れた妻が嬉しげに言った

喜和夫

アサー

信

涼

喜和夫

隆

アサー

涼

信

「連詩は最後の三行が見えて、初めて全体がわかる。完成した夜のお酒はおいしかったですね」



アーサー・ビナード

Arthur Binard

20歳の頃ヨーロッパへ渡り、ミラノでイタリア語を習得。ニューヨーク州のコルゲート大学で英米文学を学び、卒業と同時に来日、日本語での詩作を始める。詩集『釣り上げては』で中原中也賞受賞。2005年『日本語ばかりぼり』で講談社エッセイ賞を受賞。絵本に『くうきのかお』『ここが家だベン・シャーンの第五福竜丸』。翻訳絵本に『どんなきぶん?』『ダンデライオン』『焼かれた魚—The Grilled Fish』。エッセイ集には『日々の非常口』『出世ミズ』などがある。1967年アメリカ・ミシガン州生まれ。

「昨年、僕が受け持った色恋の分野を今年に野村さんに託しました。さて、いかに？」



岡井 隆

おかいたかし

慶応義塾大学医学部卒。「アララギ」を経て「未来」創刊に参加、現在、同誌編集・発行人。歌集に『禁忌と好色』（釈迦空賞）、『親和力』（斎藤茂吉短歌文学賞）、『ウランと白鳥』（詩歌文学館賞）、『ヴォツェック / 海と陸』（毎日芸術賞）、『馴鹿時代今から向かい』（読売文学賞）、『岡井隆全歌集』（全4巻）など。評論・エッセイに『岡井隆コレクション』（全8巻）、『赤光』の生誕『などがある。1928年名古屋生まれ。

二十六

アイオワのその朝はざらめのような雪がふっていた
もっと寒い国に帰るといふ若い女性詩人に
私ははじめて抱擁という当地の習慣を試みた

喜和夫

二十七

あかあかとどの部屋にも灯がともり
いつのまにか霜月の夜が来てゐた
オリヴオイルにしつとりと抱かれた野菜のやうに
わたしたちは疲れきつて
農園の向かうの闇を見つめた

隆

二十八

宝を掘り当てるんだと スコップを握って
鶴嘴を振り下ろすが 何も出てこない
穴の湿った土の匂いが せめてものぼくの宝物

アーサー

二十九

髪は肩のうえで外巻きにして
とびきりサイケなハイヒールはいて
白いスカーフ 赤いフェラーリ
おむすび片手にカッ飛ばすの
これがあたしの宝の時間

涼

三十

愛読書？ 漫画しかないのよ
あたしの好みは国際派 ジャパンは虫が好かない
オサムシなんて虫に噛まれたまんまじゃないの

信

三十一

生家の納屋にのこれるぼろの捕虫網あり
塵埃のなかより出づる箴虫の輝きてまた
ひたすらにもぐりて逃ぐる そを追ひつめぬ
読むほどに細部いよいよ浮びくる文のごとしも
あの少年がこの老翁に？ まさかそは手の込んだ嘘

隆

三十二

ある朝ぼくは
ザムザという男に変身して
仲間たちの複眼という複眼をつぶして歩いた

喜和夫

三十三

べしゃんこにつぶされた空き缶が
わが家の前の道路の真ん中に
通る車はみんなカチャカチャッといわせて
夜中 とうとうその耳障りに耐えかねて拾いに出た
「くつろぎのひとつとき午後の紅茶」だった

アーサー

三十四

午後の公園の水飲み場で 小鳥が行水をしている
偶然そこに居合わせた私は そのひとときに
思わず 会釈したくなる

涼



発表 グランシップ会議ホール・風

桜井 洋子 さくらい ようこ
NHKアナウンサー。
今回は、発表の席の司会を務めた。



「生きている言葉、
動いている言葉が
ここにがあると実感しました」



それは「疾走」のひとつき。
連詩へのオマージュをこめて。

【第三十六編く第四十編の解説】

隆…ここは前の大岡さんのインドの話
からの匂い付け。「信心」に「瞑想」と
受けて、「死」を出してみました。

喜和夫…前の「退屈」から、言葉は飽
くことがない」と。言葉というのは、
我々の力を越えていろんな方向に走り
出すんですね。最後の「言葉の連なり
のゆかしさ」は、連詩へのオマージュの
つもりで書きました。

アサー…毎月、夜行バスで青森に行
くので、その際の実話です。前の「落
葉」を、押し葉に。このあたりにくる
と、連詩ももう後がなくなつてきてい
て、あまり軽く受け流すと危ないか
なという感じですね。

涼…場が秋へと動いてきて、色彩が出
てきたので、それを風景として広げる
ことならできそうだと。そして、大岡
先生に渡しました。

信…だんだん冬へ向かつてきて、こ
れでおしまいにできると。連詩には勢
いが大切で、それは疾走する森の
ようなもの。冬の動物ということ
で「トナカイ」を出したことで、偶然に
も「馬」で始まり「トナカイ」で終わ
ることになりました。

三十五

聖地ベナレスで沐浴している象
汚れた川も陽に当たって赫耀と輝やく
信心深い蛇も怖がりの猿も
この水を浴びにくる

三十六

退屈なあまり死にさう、つていふ人に
いつそ花の香を嗅がせてみようか
瞑想のときこそ去ぬれ蘭の花、つてね

三十七

夕刊をひらくと
「雨音はまず落葉より起こりけり」
という俳句がみえその隣に
一葉が売文をきらい雑貨屋をひらいた話
かくて飽くことがない言葉の連なりのゆかしさよ

三十八

深夜の長距離バスで 隣席の
老人が手帳をひらいたら舞い落ちた
銀杏の黄色い葉 膝掛けの青に

三十九

リスは頬袋をばんばんに膨らませ
木々の間を縫って走る
空では風が大きな雲を横へ
うすくうすく伸ばしていく
秋の陽は 刻一刻と熟して

四十

馴鹿の枝ある大きな角は
冬へ向かつて林をひろげる
群れになれば 疾走する森だ

創作 二〇〇六年十一月二十三日(木)起

同月二十五日(土)満尾

於 ホテルセンチュリー静岡
参加者 詩人 野村喜和夫
木坂 涼

アサー・ビナード
岡井 隆
大岡 信

発表 二〇〇六年十一月二十六日(日)
於 グランシップ十一階会議ホール・風

信

隆

喜和夫

アサー

涼

信

空飛ぶ作家

サン＝テグジュペリ

Antoine de Saint-Exupéry



サン＝テグジュペリがお気に入りだったといわれるルノー社製のコードロン＝シムーン輸送機(C635)。1936年以降の愛機とされる赤のシムーン機は、アントワヌのANとサン＝テグジュペリのRYをとって(F-ANRY)と命名。1937年にこの機でニューヨーク＝ディエラ・デル・フエゴ間の飛行に失敗し、重症を負った。戦後、飛行可能な状態にあった1機が映画『星の王子さま』に登場している。



©1999 Espace Saint-Exupéry

26歳のとき、処女作『飛行家』が初めて雑誌に掲載される。その後、著書が世界中で読まれるようになり、パイロットしても一躍有名に。仲間内では反感も多かったが、後に敵となるドイツ空軍のファンの中には、彼の所属部隊とは戦いたくないと言ったドイツ人もいたとい



EUの統一通貨ユーロになる前、フランス通貨であった50フラン紙幣にはサン＝テグジュペリの肖像が。表には肖像のほか『星の王子さま』に登場する〈象を飲み込んだウワバミ〉の画が、また、裏には彼が乗っていたブレゲー14型機とともに有名な〈王子〉の画が描かれている。

★★★★

ひこうする

飛行する精神。

意識の中で同じ比重を持って渾然一体となっています」

ただ一つ残念なことは、パイロットとしての能力がそれほど高いものではなかったということだ。十九歳で海兵学校の受験に失敗後、兵役の入隊・除隊を経験し、民間航空界との間を行ったり来たり。墜落や不時着失敗も数知れず。けれども、こうした経験が作品の原石となっているとは、なんと因果なことだろう。

サンテックス——読者は親しみをこめて彼をそう呼ぶ。生誕百年の年、生まれ故郷リヨンの空港は、サン＝テグジュペリ空港と改名され、彼の肖像画と『星の王子さま』のイラスト、さらに乗っていた飛行機の描かれた五〇フラン札が発行された。それほど彼は飛行士として知られ、作家として愛された英雄である。

世に出た作品は極めて少なく、しかもそのほとんどは彼の飛行経験に基づくものである。彼自身、こう語っている。

「私にとって、飛ぶことと書くことはまったく一つなのです。(中略) 飛行機乗りと作家は私の

★★★

か

く



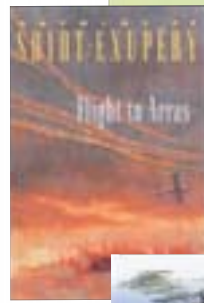
初めて単行本として出版されたのが『南方郵便機』(Courrier Sud/1929年)。飛行士としての定席に恵まれなかった作者が、ようやくあついたのが民間郵便飛行の仕事で、本作はその間に書いたもの。

★★

① ニューヨーク帰国後に書いた『人間の土地』(Terre de hommes/1939年)は、ルポルタージュやエッセイを集めた作品だがアカデミー・フランセーズから小説大賞を受賞。アメリカでは『風と砂と星々』として出版され、ベストセラーに。飛行することは耕すこと、飛行機は鎧、パイロットを農民にたとえており、作者の飛行する魂に触れることのできる名作。

② 『戦う操縦士』(Pilote de Guerre/1942年)。英語版タイトルは『アラスへの飛行』(Flight to Arras)。ヒトラーの『我が闘争』に対する民主主義側からの返答として評価を高め、アメリカではベストセラーとなったが、祖国フランスではすぐに発行禁止となり、地下出版物として反ナチ派に読み継がれた。

③ 『夜間飛行』(Vol de Nuit/1931年)は、郵便飛行会社のアルゼンチン支社長時代に執筆。フェミナ賞受賞により、作家としての地位を不動のものとした彼の代表作で、その後英訳され、映画化された。アンドレ・ジッドが自ら申し出て序文を書いたことでも知られる。サン＝テグジュペリに影響を受けたというアニメ界の巨匠宮崎駿は、新潮文庫出版の本作と『人間の土地』のカバー画を手がけている。



★

じんせい



アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ(1900—1944)は、『星の王子さま』などの著書で知られるフランスの作家であり、飛行機乗りとして知られる。生まれ故郷のフランス中部、リヨンにあるベルクール広場には、サン＝テグジュペリと王子の銅像が建っている。この広場の近くに生家があり、通りの名もアントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ通りと名付けられている。

★

雲間に消えた作家。

大空に憑かれた彼の航跡がふつりと途絶え

たのは、いまだ戦火激しい一九四四年七月三十一日。フランス内陸部の写真偵察のため、コルシカ島の飛行場を単機で飛び立ったまま、彼の姿は雲間に消える。それから半世紀が過ぎた一九九八年。マルセイユ沖で彼と妻の名、および連絡先としてアメリカの出版社名と所在地が刻まれたブレスレットがトロール船に引き揚げられる。やがて彼の乗機も確認。被弾・火災の痕跡はなく、自殺説、操縦ミスなどの憶測を呼んでいるが、墜落原因については依然謎のままである。

★★

Le Petit Prince



リトルプリンス

バックステージツアー開催決定!

舞台裏、ステージ上など普段見られない場所をご案内します。

参加資格：リトルプリンス公演チケットをお持ちの方

参加料：無料

所要時間：60分程度

集合場所：グランシップ 中ホール・大地 入口前
12:15受付 12:30スタート



平成五年度文化庁芸術祭賞
第三回読売演劇大賞・優秀女優賞・優秀スタッフ賞
第六回読売演劇大賞・優秀スタッフ賞

音楽座ミュージカル

リトルプリンス

2007.1/21(日)

開場 14:30 開演 15:00

グランシップ 中ホール・大地

一般 5,000円(当日 5,500円) 学生 2,500円(当日 3,000円)

原作/アントワーン・ド・サン＝テグジュペリ『星の王子さま』

脚本・演出/ワームホールプロジェクト 製作著作/ヒューマンデザイン

音楽/高田 浩、金子浩介 振付/上島雪夫 美術/朝倉 摂

主催/財団法人静岡県文化財団 後援/静岡県、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、テレビ静岡
助成/財団法人地域創造

「贅を尽くす雛のお着物」

八木

洋行

グランシップペンクラブ会員

高松宮妃郷土の雛祭り展の企画委員

静岡県県文化財団発行季刊誌しずおかの文化編集長

二月十三日から、現在も息づく大名飾り「高松宮妃のおひなさま展」が始まる。今回は雛具の中からお着物物をスポット展示。庶民の雛飾りには、雛具の箆箆はあつても、その中にお着物物を揃えるような例はあまりない。高松宮妃のお着物は、五棹の箆箆に合計九揃えの色とりどりのものが収納されており、またこれと



飾りの片鱗をここにも見る事ができる。帯も金糸や銀糸をはじめ五色の糸を用いて、幅3センチほどのなかにちゃんと模様が緻密に織り込まれている。これも雛具としての帯を、最初から織っているわけだ。一体どういう仕掛けの織機を用い、どんな風に織ったものか、想像すればするほど、この緻密な技に驚嘆する。

大名飾りが、有職故実に基づくて伝わってくる。是非に大きな虫眼鏡を持参され、細部にまでゆくりとなぞりながら、その日本人の工人たちが渾身をこめて残した仕事の魅力にふれていただきたい。嬉しいことに、今回はお着物物をテーマにしているの、お着物物を召してお出でになられると入場無料という特典もあるのです。是非にお着物でご来場を。

ほしのおとこみ



ニューヨークで1943年4月にレイナル・ヒチコック社から英語訳『The little Prince』とフランス語訳『le Petit Prince』を同時出版。日本では『星の王子さま』で知られる。これはサン＝テグジュペリが実際に灼熱のサハラ砂漠に不時着し、飢えと渴きに苦しんでいたところへベドウィン人に水を差し出され、救われた体験が下敷きになっており、その体験は『人間の土地』で語られている。ちなみに世界でも読まれている本は『聖書』で、二位はマルクスの『資本論』、続く三位がサン＝テグジュペリの『星の王子さま』であるという。

飛行機の故障でサハラ砂漠に不時着した「ぼく」。孤独な夜を過ごした翌日、「ぼく」はある小惑星からやってきた王子と出会う――。世界中で5千万部を売り上げる物語『星の王子さま』について、その無垢な視線と豊かな想像力、加えて作者自身による愛らしく素朴な挿絵から、児童文学の枠に納める向きもある。けれども冒頭には「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。しかしそのことを忘れずにいるおとなはいくかんじんなことは目に見えない。実際の、長じて再び読んでもみると、幼い頃の感動とはまったく別の深い感慨を得ることができる。キツネは王子との別れ際、ある秘密を彼に教える。「かんじんなことは目に見えないんだよ」と。「砂漠が美しく見えるのは、そのどこかに井戸を隠しているから」「夜空が美しく見えるのは、そのどこかに王子が今もバラと暮らしているから」――その内側に本来のものがあふれる。サン＝テグジュペリの視線は、いつも大空から地球を眺めながら、いつもその内にあるものを感じていたのだ。

☆☆☆

みゅーじかる

これまでに幾度となく映画化、舞台化されてきたサン＝テグジュペリの『星の王子さま』。この作品をミュージカルでぜひ、と思うなら、来春、グランシップで上演される音楽座の『リトルプリンス』を逃してはならない。というのも、音楽座は世界で唯一、この作品の独占ミュージカル化権を獲得しているカンパニーである。さらに、平成五年度の文化庁芸術祭賞受賞のオリジナル版『リトルプリンス』を再び観たいという声が高まり、原作の著作権期限の終了を待ってようやく実現した再演だからだ。

この上演に先立ち、昨秋十月には、小学生・中学生を対象とした出演者によるワークショップが開催された。歌のレッスンやダンスのレッスンを通してミュージカルの楽しさを知り、歌とダンスを合わせてみることでその楽しさを知ったひととき。少年の心を道案内に、まるで王子さまのように大空に消えた作者が託した言葉の一つ一つが、「音楽」に乗るとき、その魂は果てしなく、深く、観る人の心に響き渡ることだろう。

☆☆☆☆

音楽座ミュージカルは、1988年『シャボン玉とんだ宇宙(ソラ)までとんだ』で旗揚げ。その後、『とつてもゴースト』『アイ・ラブ・坊ちゃん』『泣かないで』『ホーム』『メトロに乗って』などオリジナルミュージカルを発表。これまでに文化庁芸術祭賞、紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞などを受賞している。



10/9グランシップ地階リハーサル室で行われたワークショップより。

☆☆

橘家

圓藏

しあわせな商売。

「落語っていうのは、死ぬまで苦勞する商売ですよ。でもね、72歳でまだ目標が持てる。まだ苦勞できるなんて、こんなしあわせな商売はない。苦勞なんてのは、客にしゃべる言葉じゃないけど、ありがてえなと思いますよ。」

自分の中にある情景をしゃべる。

1時間ほどの取材の後、師匠がかつて「ヨイショの月の家円鏡」と呼ばれていたことを思い出す。ヨイショというのは、そこに計算が見えると逆効果だが、本家のそれは計算どころか、その氣遣いさえみせまいとする心がある。その場の空気をほぐしながら、隅々に気を配り、人の氣持ちをすいっとつかんでしまう。師匠は落語家をしあわせな商売だと語ったが、師匠に出会った人は、寄席の内外で師匠から小さなしあわせをもらっているのだ。

——落語の世界に入る前は、紙芝居をなさっていたとかがっていますが。

「親父が紙芝居屋だったんです。全国大会で2位になって、支部長なんかもしてたんですね。それで私はというと、小学校5年生の時、山形の鶴岡市に学童疎開をしていて、ある雨降りの日に宿屋で勉強していると、先生が何かやれと言った。それでちやうと聞き覚えのあるものをしゃべったら、面白い、落語家さんになりなさいと言ったわけです。じゃあ、そうしよう。だったら、趣味と実益を兼ねるだろうということで中学生の頃から紙芝居を始めて、17歳でこの世界に入りました」

——当時の紙芝居の経験は、落語の修業に通ずるものがありましたか。

「落語家になって気づいたんですけれど、落語よりも紙芝居の方が難しい。紙芝居は一日10力所ほどやると、明くる日には絵が変わって、新しいネタを覚えなきゃならない。もちろん話は裏に書いてあるんですけど、親父はそれを読みながらしゃべるのは邪道だ、覚えなさいと言った。だから、絵を見ながらしゃべるわけですが、覚えた頃にはまた新しいものですよ。ところが落語は一度覚えたら、一生使えます。まあ、重みは違いますがね。落語に絵はありませんが、落語家は自分の中にある、その情景をしゃべるんだと思います。たとえば僕が隅田川の花見の情景をしゃべる。でも、お客さんは隅田川だろうが、東京湾だろうが、思い浮かべるものは自由なんです。」

——さらに話芸では笑わせることが最も難しいといいますが、

「笑わせるというのは、健康にいいだね。お客さんじゃなくて、俺にとってね。ウケル

とスツとする。でも、ときには腹立つことでもあります。あんな、寄席に何しに来たのって聞きたくなる。広島あたりで落語をやった帰り、飛行機の窓におでこをつけて泣いたことがありますが。なんで俺はあの客をおさえられなかったんだと悔しくてね。そういう時があるの。そこは紙芝居とはえらい違いですよ。でも、逆にお客さんを引きつけた時は嬉しいねえ。年に5百席のうち、ああ、今日はよくできたな、と思えるのはわずか5席ほどなんだけどね。ウケても、それなりに聞かせても、自分が満足できて、落語家になって良かったと思うのはせいぜい5回なんだよね。」

——七代目橋家圓蔵師匠、八代目桂文楽大師匠のもとでの修業時代はいかがでしたか。

「何にも辛くなかったな。覚悟してしましたから。それこそ内弟子になって、道路に水を撒いて、それが凍って裸足でその上を歩く。冷たい風呂場を洗う。そんなことは平気でした。それよりも落語の上で予期していなかった苦労がありました。ウケなくて、どんな深みにはまっていくな。野球でいえば、出れば打たれる、出れば三振。そうなるって迷っちゃったんだ。俺にこの商売の素質がなかったんだ、そう思う時の辛さたらないよね。」

——亡くなられた林家三平師匠とは、先代の圓蔵師匠の門下で兄弟弟子の間柄でいらしたそうですね。

「三平師匠は兄弟弟子でした。偉い人だね。昭和の爆笑王と言われますが、テレビの中とは違って、とても真面目な人でした。当時、

僕は「うちの節子が…」で売れましたが、節子っていうのは、もともと大師匠の所の女中で、それと私がくっついたもんだから、みんな節子はどした、節子は元気かと聞いている。それが嫌だね。じゃあ、それを逆手に取ってんで、いやあ、節子が馬鹿だ、元氣だちて楽屋で言ってたわけです。その時すでに三平兄さんはよし子さんで売れ



NHK《落語名作選集》リレー落語『死神・火焔太鼓』/1990年4月19日放送
「落語スペシャル」より圓蔵版リレー落語は、無関係な二席の噺を師匠がひとりてつなげて語ってゆく趣向。

てましてね。実の奥さんは香葉子さんです。から、よし子というのは架空の人物ですけど。まあ、それで三平兄さんが言うんです。俺がよし子で受けたんだから、お前は節子でやれと。だけど、俺が元祖でお前は支店マネは絶対いつか崩れる。その時に出てくるのがお前の芸だからな、とね。この人はやはり大物だなと思いました。今、テープが

残っていないのは本当に残念ですが、三平兄さんの古典落語は本当に面白かった。誰もマネできない。あの感覚はついていけないですよ。それに比べたら、「よし子さん！」なんて、「へ〜です。(笑)」

落語はアドリブの数学。

——師匠がテレビに初めて登場された頃は、そのスピード感あるしゃべりに世間は圧倒されました。

「俺はね、他人の落語を聞いててイライラしちゃうの。落語っていうのは、国語に強い奴、数学に強い奴が向いていると思うね。アドリブの数学。たとえば50÷32と言われて、すぐに計算できなくても、この辺だな、ということがピンとわかることが大事なんです。私は弟子に教える時、そろばんで教えるんですよ。たとえば、そうでありました」と言っていると8文字で、それを「そうだった」と言えば3文字削れて5文字になって、スピードが出る。まあ、これにはヒントがありましてね。私の大師匠の桂文楽が若手の頃、「え〜、馬鹿馬鹿しいお笑いを、え〜…」という具合に「え〜…」というのが多かった。そうすると、(三代目三遊亭)円馬という人が「このえ〜」の度におはじきをポーンと投げる。1席終わって数えてみて72個あると、50まで減らせと言った。で、再び1席やって40だとすると。じゃあ、今度は30個まで減らしてみろ。そういう具合にムダを削っていく訓練をしたんですよ。ただ、これを0にしちゃったら、

落語家は一生家庭を顧みてはダメだと語る。「そりゃ、女房も娘も可愛いけど、そういう商売だから。終点のないのは山手線の運転手と落語家ですよ。」

【たちばなやえんぞう】

落語家。当代は八代目。中学生の頃より紙芝居の職業を体験。1953年に四代目月の家圓鏡（後に七代目橋家圓蔵）に入門。前座名は橋家竹蔵。桂文楽の内弟子をつとめ、'55年橋家升蔵で二ツ目、'65年に真打に昇進し、五代目月の家圓鏡を襲名。立川談志、三遊亭円楽、故古今亭志ん朝とともに、落語四天王と呼ばれる。'82年に八代目橋家圓蔵を襲名。圓鏡次代、演芸ブームで脚光を浴び、TBS「お笑い頭の体操」、テレビ朝日「日曜演芸会」、ニッポン放送「円鏡のハッピーカムカム」等で一躍人気落語家となる。林家三平の「ヨシコさん」に対し、「ウチのセツコが」というフレーズが大いにウケ、また、立川談志との当意即妙な掛け合いで湧かせた「談志・円鏡歌謡合戦（ニッポン放送）」は今や伝説的番組となっている。34年、東京都生まれ。

その落語はメチャメチャになります。自分の間がつかなくなるからね。これを自分はそるばんで教えたわけなんです」

——そういえば、眼鏡をかけて高座に上がった初めての落語家は師匠だったそうですね。

「そうらしいね。レンズが光ると表情が死ぬから、普通は外すんだけど、俺は表情を見せるほどの落語家じゃない。動きや言葉で笑わせる落語家だと思ってましたからね。別にツツパツで眼鏡を外さないんじゃないって、外すと客席が見えない。客の顔を見ながらパババツとしゃべっていくのが、私の財産だと思っているんです。」

——その眼鏡をトレードマークに、昭和30年代後半は、テレビやラジオで師匠の声を聞かない日はなかったほどでした。

「売れたね。(笑)でも、テレビの世界でこのままやっていくとは思わなかった。やはり落語が本業であると。ただ、お金がほしかったからね。だからっていくらじゃなきゃというのもなくね。幸いレクターにかわいがられたんです。ラジオドラマで、おい、魚屋一人って呼ばれると、出て行って、「ちわ、魚屋です」と言ってる。また、新聞屋一人って言われるとまた出て、「新聞屋でございってね。一声で700円。それがマスの仕事の最初。その後、名前も升蔵から円鏡になって、テレビ局を幾つも掛け持ちしてね……うん、儲かったなあ。(笑)」

——それがある時を境にマスコミへの出演を控えられるようになった……そこには何かきっかけがあったのでしょうか。

「そろそろ落語に戻らなきゃと。不思議なもので、そういう意識が働くと、自然に芸がそうなるって、テレビの仕事が自然に減りますわな。でも、それもよしと。私は決して落語を捨てなかった。大事に思っていました。三平兄さんもあれだけテレビに出ていても、決して寄席は捨てなかったですね。」

——半世紀以上の落語人生の中で、落語に對する意識は変わりましたか。

「いつも言うんだけど、落語家はうつしかないと思ってるんです。上手い落語家と達者な落語家、面白い落語家ね。上手い落語家というのは、亡くなつた古今亭志ん朝さんでしょう。達者な落語家は立川談志兄貴ね。この二人にはかなわない。じゃあ、俺は面白い落語家を目指すしかないじゃないかと。そうすると、同じような奴がどんどん出てきても、ちつとも怖くない。やらかみもない。だけど、面白落語だけは出させねえと。しかし、そう思っているもんだんだん後輩に抜かれていきますよ。20年位前かな。先代の(柳家)小さん師匠に、「俺(春風亭)小朝に負けちゃったって言うたんです。あいつのパワーについていけないと。そうしたら、バカ、お前はあいつより古いんだからテクニクでフォローしろ」と言われましてね。なるほどと。それで楽になりました。落語っていつかは、死ぬまで苦勞する商売ですよ。でもね、72歳でまだ目標が持てる。まだ苦勞できるなんて、こんなしあわせな商売はない。苦勞なんてのは、客にしゃべる言葉じゃないけど、ありがてえなと思いますよ。」



2007.1/28日
チケット発売中
グランシップ 正月寄席
13:30開場 14:00開演
グランシップ 中ホール・大地
全席指定 3,000円

出演 落語 橋家 圓蔵
漫才 昭和のいる・こいる
落語 立川 談幸
三味線 三遊亭 小円歌
落語 柳家 三三
落語 春風亭 栄助